

令和8年5月22日(木)

学校名 鈴鹿市立稲生小学校

学校長名 長谷川 浩

令和8年度 校内研究実施計画書

1. 研究主題及び教科

〈研修主題〉	主体的に学ぶ子どもの育成 ～言葉に着目し、物語を読み味わう国語科の授業づくりを通して～
教科・領域	国語科・物語教材

2. 主題設定の理由

(1) これまでの研修の成果と課題

本校では2年前より、生活科・総合的な学習の時間を切り口に研修を進めてきた。「子どもたちが自ら問いをもち、学び続けること」を目指し、体験学習や出会い学習の充実、情報収集の前に仮説を立てる工夫、収集方法の多様化など、目指す子ども像の実現に努めてきた。これらの取り組みにより一定の成果が得られた。成果の中でのいくつかを取り上げる。

1つ目は身近な教材を用いた体験活動を通して、児童が物事を見たときに疑問をもつ姿が増え、予想をもち、体験だけでは解決できない問いに対して、本やインターネット、家庭や地域の人々に尋ねるなどの方法で解決することができたことである。

2つ目は、情報収集の前に仮説を立て、その際に想像ではなく根拠に基づいた予想を意識させることで、児童が自発的に見学に出かけたり、根拠を探そうとしたりする姿が見られたことである。

3つ目は、体験学習を通して、児童の中に自然と問いが生まれ、その問いをもとに調べたり比較したり話し合ったりする姿が見られるようになったことである。

一定の成果が得られた一方で、課題も見えてきた。それは、「考えたことや学んだ情報を発信する力（伝える力）」である。文章の組み立て方が十分に整理されておらず、内容のまと

まりにかけるため、伝えたいことが明確に表現できていない。また、語彙が限定的であり、適切な言葉を用いた表現にも課題が見られる。

さらに、令和6年度の学力調査等の結果からは、本校の子どもたちの「国語科に対する意識」に課題があることが浮き彫りになった。「国語の勉強は好きですか。」という課題に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」といった肯定的回答が、全国では58.3%だったことに対して、本校では43.1%と15.2%も全国の結果よりも下回った。この結果から、国語科に主体的に学習に取り組む姿にも課題が見られることが分かった。国語やその他の教科や学習に対して、受け身になるのではなく自ら進んで学びをコントロールする力を育成する必要がある。

また、学力面においても、今年度は全国平均を0.2ポイント上回ったものの、3年前の本校の結果と比較すると2.7ポイント下落している。誤答の傾向を詳しく分析すると、問題文の内容を正しく理解せずに解答していたり、設問をよく読まないまま答えていたりするパターンが多く見受けられる。これは学力調査に限らず、日常のテストやプリント学習においても「問題を精読できていない」と感じる場面が多々ある。また、「読書は好きですか。」という課題に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」といった肯定的回答が、全国では69.7%だったことに対して、本校では60.6%と9.1%も全国の結果を下回っている。この結果から文章をや文字を読むことに関して、抵抗感を抱いている児童が一定数いると見られる。国語科の全領域において課題は見られるものの、その中でもとりわけ「読む力」の育成が急務である。

以上のことから、今年度の研修では、教科・領域を「国語科・物語」子どもたちに付けたい力を「主体的に学ぶ子どもの育成」「言葉に着目し、物語を読み味わう国語科の授業づくりを通して」という2点に定め、研究を推進する。

(2) 本校の課題の詳細

(1)で本校の課題について触れたが、具体的な姿とその原因を考察した内容を記す。

課題の1つ目は、児童の学習に対しての意欲が低いということである。この理由としては、児童が学びを主体的に行うという意識が低いということが関係していると考えられる。その原因として、教師の授業展開の仕方にも課題がある。各教科の授業を行う際に、児童が学びの内容や学習形態を選択できる場面を設けるような授業展開になっていないことがある。また、児童自身で単元の学習計画を立てて取り組むような授業を展開することができていないので、教師から課題を与えられることを前提で授業に臨む児童が大半であることが予想される。もちろん、毎回の授業でこのような展開や活動を行うことは難しいが、そういった場を増やしていくことが必要である。さらに、授業の前の教材研究の取り組み方にも課題があると考えられる。教科書の指導書通りに授業をするだけでは、児童に驚きや面白さを感じさせる

ことは難しい。児童が面白くないと感じる授業は、教科書をただ音読したり、板書を写したりするだけの授業である。教師の深い教材研究を踏まえながら授業を行うことで、児童の急な質問にも対応できたり、興味をもたせることができたりすると思う。もちろん、「児童を置き去りにする」授業を行うわけではないが、一定の知識や研究は授業を行う上で必要になってくると考える。

課題の2つ目は、学力が全国平均や県平均よりも低いということである。さらに、C層やD層と呼ばれる児童が多い。基礎的な知識に欠落のある児童が多く見られる。C層やD層の児童は、教師からの問いに自分から考えをもつのではなく、他の児童の意見をノートに書くだけという傾向があると考ええる。また、テストやプリントでも一度読んで問題文が理解できないなどの理由で、問題に取り組むことを諦めることがあるからであると思う。そのために、国語科を切り口として読む力を育てることが必要であると感じる。また、家庭の学習時間も全国平均に比べて著しく劣っている。学年で決まっている家庭での学習時間に取り組ませることが必要である。そのためには、宿題や読書の時間に取り組んでもらう必要があるので、保護者からも声掛けしていただきたいと考えている。

3. 目指す子どもの姿

(1) 子どもに付けたい力の解釈

今年度の研修では、教科・領域を「国語科・物語」として、子どもたちに付けたい力を「主体的に学ぶ子どもの育成」「言葉に着目し、物語を読み味わう国語科の授業づくりを通して」という2点に定め、研究を推進する。では、「主体的」と「言葉を読み味わう」という二つの言葉の解釈を記す。

「主体的」

自分の意志や判断に基づき、行動や意思決定の中心として他に働きかけること。単なる活動への参加ではなく、自らが学習の「主（あるじ）」となって学びを動かしていく状態を指す。

「読み味わう」

文章を単に表面上で追うだけでなく、言葉が持つ意味、感情、奥深さを時間をかけて深く感じ取り、楽しむこと。

(2) 目指す子どもの姿

主体的に学ぶ姿 (学習の調整と選択)	深く読み味わう姿 (言葉への着目と解釈)
自律的な学習: 学習課題を自ら設定し、集中して取り組む。	根拠に基づいた読解: 本文の叙述を探し、読みや考えを深める。
自己決定: 「何を学ぶか」「誰と学ぶか」などを自身の状況に合わせて選択する。	精読と気付き: 情景描写や比喻表現に着目し、表現の工夫に気付く。
目標への努力: 個々の目標をもち、その基準に到達するために自律的に努力する。	想像と解釈の享受: 物語の情景を想像し、自分なりの解釈を持ちながら読む過程そのものを楽しむ。
対話を通じた深化: 自分たちで問いを立て、仲間と共に学びを深める。	主体的な参加: 物語に対して解釈を持ち、表現することに喜びを感じながら授業に参加する。

4. 研究内容及び具体的な取り組み

(1) 国語の教材に対して深い、教師自身の解釈や見解をもつ。

教材に対して教師自身が深い解釈や見解をもつ。同じ学年や他学年、あるいは専科の教員や校長と積極的に教材研究を行い、多角的な視点を取り入れる。他者との協議を契りあるものにするため、事前の準備を徹底する。児童と同じ書き込みシートに自ら書き込み、文章の構造や語彙の響き、児童が抱くであろう疑問点を把握する。教材の内容や背景について、気になった事項は徹底的に調べる。また、文献調査にとどまらず、実際にゆかりの地や現地を訪れることで、実感を伴った言葉で指導できるようにする。

(2) 児童が物語に対して自分なりの解釈や考えをもつことができる。

まず、全文書き込みシートを用意し、自分の考えを書き込めるようにする。初発の感想の段階ではまだ読みが浅いため、言葉の意味を調べたり、シートへの書き込みを重ねたりした上で、じっくりと自分の解釈をつくれるように工夫する。また、物語を読んで「変だな」「おかしいな」と感じたところから、自分たちで「問い」を見つける活動を大切にする。その問いに対し、本文の叙述(根拠)を探しながら自分の意見をまとめる過程で、深い解釈が生まれる。そのため、子どもたちの思考を動かすような教師の発問や、児童同士の問いの出し合いが重要

になる。

(3) 目的をもった音読をおこなう。

国語の授業の終わりに、次に考えるべき学習課題を提示する。その課題に向けて音読を行うことで、児童が自分なりの解釈を持てるようにする。また、音読の記録を記述式にすることで、単なる読みの練習に留めず、授業での学びと関連付けた音読を定着させる。このように、目的を明確にした音読を通して、文章の内容を主体的に読み解く力を育む。

(4) 物語の作者や関連作品に触れ、物語の良さを味わう。

児童が本を手に取りやすい環境を作るため、教室内に並行読書用の本を置く。また、「〇〇(作者名)の本を読もう」といった図書イベントの開催を通じ、児童が意欲的に読書に取り組めるよう働きかけを行う。

(5) 学習を児童自身で進めたいという気持ちをもたせる。

主体性を支えるのは、課題の面白さである。複数の考え方に分かれ、討論ができるような問いを設定することで、児童同士の自然な対話を促す。自分にはない見解に触れる刺激が、課題に対する児童の積極性を引き出し、学習をより深化させる。

スプレッドシートを用いたルーブリック評価を「めあて」の代わりに活用し、児童自らが学習の到達目標を確認できるようにする。また、複数の課題を用意して「何を、誰と学ぶか」を児童が選択できる個別最適な学習を取り入れる。このように課題別にグループを形成することで、主体的な学びを実現する。

児童に「自分たちで学習を進めてよい」という認識を持たせることが不可欠である。その第一歩として、振り返りの中に「次の授業でやりたいこと」を記述させる。教師はそれを反映させた授業を準備し、児童の言葉を起点として学習を展開していく。

(6) 読書の時間や本を読むのが好きという児童を増やす。

低学年は月に6冊以上、中学年は月に4冊以上、高学年は月に2冊以上の貸し出しを目標とする。また、テスト後や給食後の時間を活用して読書時間を確保するとともに、教師が本を読むことの価値付けを丁寧に行う。さらに、毎週木曜日を本の貸し出し日として設定し、週末に本を読む習慣を定着させる。授業では、図書の時間に、ビブリオバトルやブックトークを取り入れ、互いにおすすめの本を紹介し合うことで、多様な本に親しむきっかけをつくる。

(7) 問題文をよく読む習慣をつける。

テストやプリントに取り組む際、重要な箇所に傍線や波線を引いたり、数字を丸で囲んだりする具体的な手法を徹底する。これにより、内容を漠然と捉えて何となく解いている状況を改善する。また、設問の細部まで読み込まなければ正解できない問題を用意し、精読の必要性を実感させる。単に答えを出すだけでなく、問題文の条件を正確に把握することに価値を

置き、思考の精度を高める指導を行う。

(8) 家庭で一定量の学習を行う。

家庭学習の習慣を定着させるため、宿題の量をこれまでより増やす。教師が全てを採点するのではなく、児童自身が答え合わせを行う。自分の間違いを自分で見つけ、正しく直す力を育てることを目的とする。学年に応じた家庭学習の目標時間を具体的に提示する。この目標時間を教室内の目立つ場所に掲示し、児童が常に意識できるようにする。

5. 日常での取り組み

(1) 学習規律

①「あいさつ」

- ・授業を始めるとき、終わるときに、きちんとあいさつをする。
- ・特支や国際、通級などに行く児童のことも、学習する場所が違っただけでちゃんとクラスの一員だという意識を学級全体にもたせる。
- ・あいさつをするときは、書いたり片付けたりする手をとめる。

②「学習の机」

- ・「学習するのに適しているか」を意識付ける。
- ・机の上には学習に必要なもの以外は出さない。
- ・授業後は、次の授業の準備をして机の上に揃えてから、休み時間を過ごす。
- ・水筒は、教室の決められた場所に置く。
- ・水筒を机に持ってきて授業を受ける際は、机の上ではなく、机の横にかけるか床に置く。

③「ルール」

- ・必ず名前を書く(特に鉛筆、消しゴムなど)
- ・ノートを書くときは下敷きを使う。
- ・クロームブックを使うときは、ノートや教科書の上に置いて傾いて使うことがないようにする。
- ・教科書は左側、ノートは右側に置く(左利きの子は逆に置く)
- ・必要に応じて、筆箱の中身のチェックや引き出しの片付けをする。
- ・放送やチャイムに合わせて、席に座り、静かに学習の準備を始める。
- ・急な聞き取りなどで、開始時にもし授業者がいない場合は、あらかじめすることを指示しておいたり、ふだんからルーティーンを作っておいたりして、スムーズに授業が始められるようにする。
- ・授業の終了チャイムが鳴るまで教室(体育館・運動場も)を出ない。
- ・移動教室(行き)は、4月の間は授業者が引率する。5月以降は児童に実態に応じて行う。
- ・移動(帰り)もできるだけ授業者が引率するが、しない場合は必ず事前指導を行う。
- ・特別教室は、子どもたちだけで入らない。
- ・その他、クラスで決めた約束事は必ず守れるように指導する。

(2) ノートの使い方(教科や学年の実態に応じて工夫する)

- 各ノートに日付を書く習慣をつける。
- 問題番号は、左から右に書く。
- 教科書やノートの枠外に小さく筆算をしない。
- 宿題ドリルノート…途中計算式があるかどうかをチェックする。(計算過程を重視する。答えを丸写しせず、わからないときは答えから類推して考えさせる。)
- 学年や単元、教科に応じて縦線を引き、インデントにする。縦線の左側には、ページ、問題番号などを書く。
- 問題と問題の間は一行空け、見やすくなる工夫をする。
- 直線は必ず定規で引く。「右手に鉛筆、左手に定規」を徹底する(利き手が違う場合は逆に)
- めあては青えんぴつ、まとめは赤えんぴつを使って囲む。
- 算数の文章問題は3点セット(横式、筆算、答え)でまとめる。

(3) 学習用具

- 筆箱のなかみは、削った黒鉛筆5本程度。赤青鉛筆は1〜2本(折れた時は学校で削ってよい)定規1本 消しゴム1個
- 下敷きを使う。

(4) 整った学習環境づくり

- ・黒板の真上の掲示…学習の妨げになるような物は何も貼らない。
- ・教室の掲示物…同じ作品は二か月以上貼らない。
(学習に必要な、あるいは意欲をもたせるような掲示物を考える)
- ・学び合うための掲示…「話すルール」「聴くルール」のクラスごとの設定

(5) 家庭学習の充実

- 基本的に「音読」・「漢字」・「計算」の3点を出す。クロムブックを活用する。
- 家庭学習のてびきを発行し、保護者と連携して取り組む。
- 子どもたちの自主性や意欲につながる自主学習を工夫する。

(6) 読書活動の充実

1. 教室

- ・テスト後や給食を食べ終わった後には読書をさせる。
- ・常に、読みかけの本を絵本ぶくろに入れて机の横にかけておくようにさせる。

- ・学級文庫や家から持ってきた本も絵本ぶくろに入れておく。
- ・国語などで勉強した作品の関連図書を紹介するようにする。
- ・読みかけの本に挟むためのしおりを持ってきてても良い。

2. 図書

R8 学校図書館活動計画

月	月間目標(例) ※担当職員と図書委員会が考える	イベント・活動
4	きまりを守ってよい図書館にしよう。	
5	本を大切にあつかおう。	
6	本の分類を意識しよう。	イベント①
7	読んだことがない種類の本を読もう。	
8	夏休み中、図書館を利用しよう。	
9	学習に役立つ本を読もう。	イベント②
10	読書感想文で、感じたことを伝えよう。	親子読書配布
11	家族でたくさん本を読もう。	親子読書実施(2週間)
12	読書感想画で、感じたことを表現しよう。	イベント③
1	冬休み中、図書館を利用しよう。	
2	調べ学習に本を利用しよう。	イベント④
3	読書生活を反省しよう。	

図書館環境づくり

- 季節の飾りや新しい本・学年の本紹介コーナーを作り、足を運びたくなるような図書館にする。
- 図書委員による「図書館まつり」を行い、本の読み聞かせや紙芝居を行う。

月ごとの読書目標

- 月に「低学年は6冊、中学年は6冊、高学年は2冊以上」図書館で本を借りることを目標にする

◎教職員間の交流

- ・全学年での研究・公開授業、事後検討会の実施
- ・積極的な授業公開・参観の実施
- ・研修だよりの発行

研修会等を通して…

- ・個々の目標や課題の設定
- ・取組に対する振り返り
- ・個々の取り組みや悩みについて意見交流

6. 研修日程

令和8年度 稲生小学校校内研修日程（案）

2026.5.20時点

日程	行事	研修内容	学年	備考
4/3(金)	第1回全体研修会	1. 校長より 2. 今年度の研修計画 3. 指導教諭より		
5/12(火)	第2回全体研修会	見続けるレポート研修会		
6/29(月)	第3回全体研修会	提案授業①(研修) ※ 指導主事来校	5年	5年研究授業 事後検討会
8/3(月)	夏季校区研修会A M			
8/4(火)	第4回全体研修会	・レポート研修会 ・部落差別学習		
8/5(水)	第5回全体研修会	・国語の授業改善研修 ・ICT活用実践報告		
8/24(月)	第6回全体研修会 AM	・学調分析等		
10/7(水)	第7回全体研修会	提案授業②(研修) ※ 指導主事来校	2年	2年研究授業 事後検討会
10/24(土)		各自実践 授業を見合う		運動会
11/11(水)	第8回全体研修会	提案授業③(研修)	4年	4年研究授業 事後検討会

2/22(月)	第9回全体研修会	提案授業④(研修)	6年	6年研究授業事後検討会
3/3(水)	第11回全体研修会	研修、人権の成果と課題検討		
3/8(月)	第12回全体研修会	筑波附属小学校還流		
3/12(金)	第13回全体研修会	各部会からの来年度の方向性検討		

＊現時点では、このような予定となっておりますが、必要に応じてミニ研修や全体研修会を行うので、予定してある研修会よりも多くなると思います。

(1) 提案授業について

- ・1年間を通して、各学年で提案授業を行う。
事前説明会→提案授業→事後検の流れ
※ 事前説明会の日は直前に設定(30分程度)する。
- ・本年度の研究に対する仮説を実践して検証していく場にする。
通常の授業で年間を通して取り組んでいることを提案するという意識をもつ。
- ・参観者は、こどもの反応と授業者の手立ての両方を同時に観察する。
授業の良し悪しではなく、こどもの学びの姿から授業の在り方を考える。

(2) 全体研修会の持ち方(人権との関連)

- ・全体研 → 研修4本+人権2本=計6本
 - ・ 学年研 → 総合6本
- ・公開研 → 年間で、国語か総合を1人1本以上
⇒ 専科の先生は、授業を行っている教科を公開する

7. 校内組織図

